

# 炭素・窒素同位体分析により 復元した先史日本人の食生態

Dietary Pattern of Prehistoric Japanese Populations Inferred  
from Stable Carbon and Nitrogen Isotopes in Bone Protein

南川雅男

## 緒言

- ① 原理
- ② 方法
- ③ 結果
- ④ 考察

## 【論文要旨】

縄文時代 弥生時代およびそれ以降の遺跡から出土した 172 個体の古人骨の炭素、窒素同位体組成の結果から当時の食物利用構成を復元する方法を検討し、得られた結果について人類生態学的な考察を行った。骨コラーゲンの  $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$  は日本列島の各地域で先史人の摂取した食物の構成の変化を示していた。骨コラーゲンと食物の間の同位体分別の値を検討し、先史人の利用食物の復元を行った。また、遺跡出土の食用資源の遺物を分析し、先史時代における 5 種類の食糧資源の同位体組成を求め、この値を用いてモンテカルロ法による食物構成の復元を行った。その結果、北海道で海産大型動物への強い依存が縄文前期から後期、続縄文時代をへて近世アイヌまでつづいていた事実とその食物構成を明らかにした。比較的高い海産物への依存は、北海道ほどではないものの九州や瀬戸内海沿岸の貝塚遺跡集団にも認められた。しかし、東北や関東地方の貝塚遺跡では魚介類の利用の程度は比較的低く、むしろ植物資源を中心とした食生活であったと推定された。内陸の山間部や盆地に居住した縄文人はもともと植物資源に依存していた。一方、弥生人である土井ヶ浜では海産物の利用は少なく、植物資源に依存した農耕民であったことが示唆される。この構成は関東・東北地方の貝塚民とよく似たパターンであったが、タンパク質の補給源として陸上動物の摂取割合が高いことが異なっていた。先史日本人全体について、雑穀などの C<sub>3</sub> 植物は主要な食糧ではなかったが、三貫地や津雲遺跡では重量で 2 割未満の利用があった可能性がある。

キーワード：古人骨、獣骨、魚骨、植物遺体、炭素同位体、窒素同位体、食性解析、縄文人、弥生人、古墳、擦文、近世アイヌ